

〈本文〉

九番

左 持

霰あられ

あかつきの霰は冬の信マユコトかな

李下

右

森ふかく野馬飛込あられかな

伸風

烈風寒威、暁の寢覚、冬のまこと、

いへるぞ、かくてはよにもあられふる哉

と吟声さびしきに、右は又、

野馬の霰まぐに驚たるさま、能

云叶られたり。聞処きこ見る処、師曠しこ

が耳をそばだて、離妻りよが目のさやを

はづすといふ共、左右の是非弁ずる

事あたはじ。

〈現代語訳〉

左 持

霰

夜明け前のほの暗い頃に降る霰の音を聞くと、冬も本番になったとしみじみと感じられる。

\* 霰とは、空中の雪に過冷却の水滴が付着した、白色不透明の小さな氷の粒である。古くは夏に降る雹も霰に含められる場合もあり、『類船集』の「霰」の項に「夏の日、白雨にいかづちはためき霰のふる事まゝおほし」とあるが、近世の多くの歳時記は冬の季題として載せる。なお現代の気象学上では、季節に係なく直径5ミリ以上のものを雹、それ以下のものを霰と呼び分けている。和歌では寒い夜の孤独感をつのらせるもの、玉のごとく美しいものとして詠まれるほか、霰が板屋などに降る音のわびしさが詠まれる。また「〇〇のまこと」という表現も和歌で多く用いられるが、「ゆめのまこと」「うつつのまこと」「心のまこと」「法のまこと」「人のまこと」といった用例が中心で、その時節らしさの象徴といった意味で詠まれた例は見られない。また、この句は「神無月降りみ降らずみ定めなき時雨ぞ冬の初めなりける」（後撰和歌集・冬歌・四四五）や、謡曲『定家』にも取られて有名な藤原定家の「偽りのなき世なりけり神無月誰がまことより時雨初めけん」（続後拾遺和歌集・冬歌・四一五）をふまえており、時雨を意識した詠みぶりとなっている。「冬の信」は、「冬のはじめに降る時雨」に対して「本格的な冬に降る霰」というニュアンスを表しているといえる。

右

突然降り出した激しい霰に驚いて、放し飼いになっている馬が慌てて森の奥深くへと飛び込んで走っていった。

\* 森と霰、馬(駒)と霰、いずれも和歌では一般的ではない取り合わせであるが、『千五百番歌合』に霰に驚いて雉子が飛び立つさまを詠んだ歌が見える。  
九百八十五番

左 隆信朝臣

いしまわけおつるよそめはそれながらおとせぬたきやたるひなるらん

右 家長

こまなめているののすゑにあられふりまだかりゆかぬきぎすたつなり

左歌、さも侍りなん。右歌、あられにきぎすのおどろきてたたん、さもときこえ侍れば持にや。

俳諧では野馬は天象とともに詠まれることが多く、近い頃の例では「親と子の霜夜をかこふ野馬哉 溪石」(『続の原』)「稻妻に母を離れぬ野馬哉 等鹿」(『惹摺』)「うらゝさや野馬ふりむく朝日影 元峰」(『桃の実』)「身は楽に時雨を通る野馬哉 残香」(『笈日記』)などが挙げられる。深山に降る霰、という伝統的なイメージをふまえ(『類船集』)「霰：深山」、突如として降り出す霰の激しさを、霰の音に驚く馬の動作によって描写した点が新しいといえる。

### 〈判詞〉

激しい風と厳しい寒さ、暁の寢覚めのわびしさを感じさせる霰の音を、「冬のみこと」と表現したところは、和歌に「かくてはよにもあられふる哉」と詠まれたさびしい吟声そのまま、右句はまた、野馬が霰に驚いたさまを巧みに表現している。聞くところ、見るところ、たとえ非常に聴覚に優れた師曠が注意深く聞き、非常に視力のよい離婁が目まをこらして見たところで、左右の優劣を判じることができないであろう。

\* 「かくてはよにもあられふる哉」は、「古屋霰」を詠んだ頓阿の「年をへてあれ行く宿の板びさしかくても世には霰ふるなり」(草庵集・七六〇)を指す。この歌について宣阿著『草庵集蒙求診解』(享保八年刊)では「宿のあれうき住居なるに、ことに板屋は霰の音のはげしくて、寒きにかくのごとくにてもあればあらるゝ物也とよめり」と注され、荒れ果てた板屋に霰が降って激しく音を立てている、わびしい冬の情景が思い浮かべられている。「聞処見る処」とは、左句が聴覚的に、右句が視覚的に霰をとらえた句であることを言ったものである。師曠・離婁は『蒙求』の師曠清耳・離婁明目の故事に登場する人物の名前である。「目のさや」はまぶたのこと、『犬子集』に「ゆふだちや目のさやはづす稲光 徳元」と詠まれるように「目のさやをはづす」で、注意してよく見るとという意の諺として通用していた。